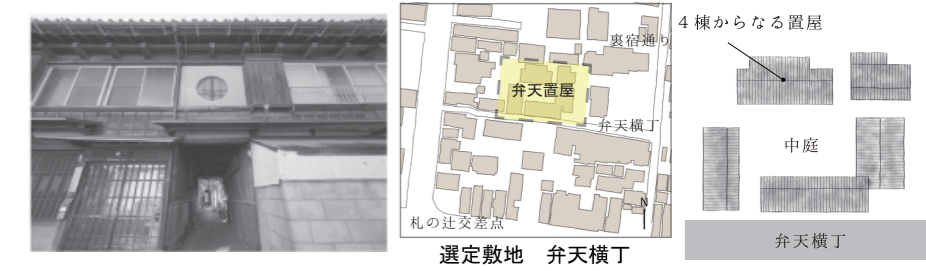


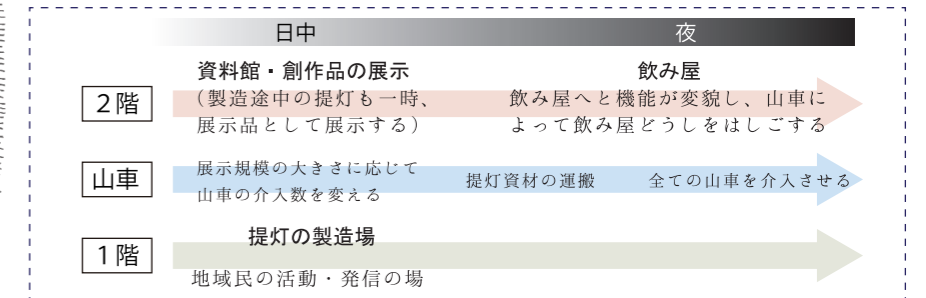
敷地は埼玉県川越市の中心部に位置する花街の遺構である弁天横丁を選定した。この横丁の中心部には、かつての花街の拠点となった置屋が今も残る。置屋とは、女将のもとで大勢の芸者たちの衣食住の世話をする家であり、ここで芸者たちは、昼は唄・踊り・三味線などの稽古に励み、夜は店に出て、客をそれらでもてなした。また、置屋建築は建築上の特徴として中庭があり、それを囲うようにして数棟の宿場から成る。今回、この特徴的な置屋の建築構成に着目し、改修して再活用し、横丁の中心的顔となるよう再編を目指す。



計画 1日の置屋機能の変化と山車の移動

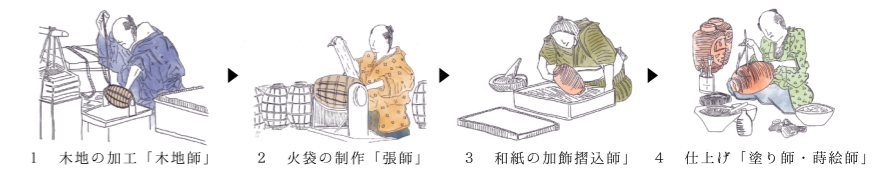
＜時間に応じた置屋の機能変化＞

基本的に地域民・観光客が協力して山車を曳いて移動させるほか、定期的に地域民が山車をメンテナンスすることにより地元文化への誇りや愛着心を観光客と共有する機会を設ける。置屋と山車のスケール性上の特徴から、山車が置屋間に介入することにより新たに空間が創出される。1階部に衰退地区大手町の提灯職人の政策場を工程ごとに設け、山車の介入によって資材を運搬させる。2階部は日中は資料館や展示、夜は飲み屋へと変貌し、山車の介入によって、棟同士を移動してはしご飲みする。

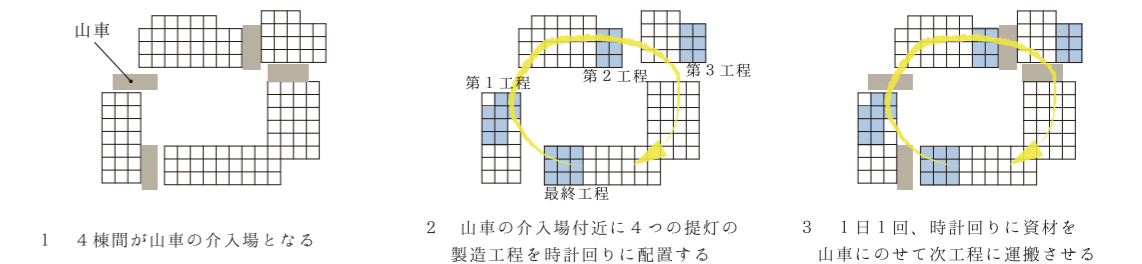


＜衰退地区大手町の高張提灯産業の製造場として＞

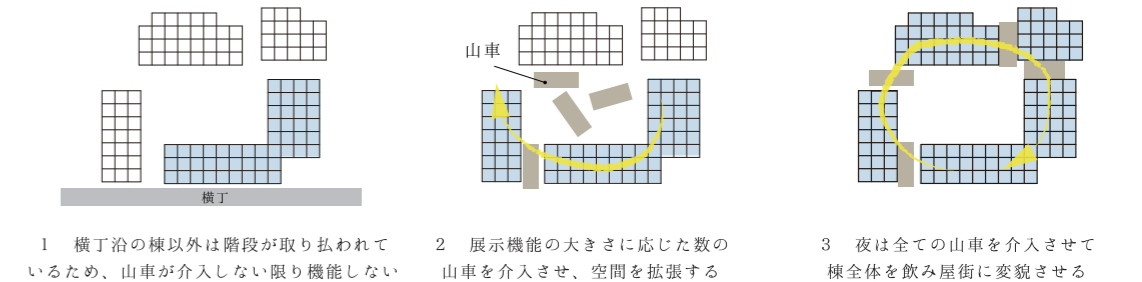
衰退地区により、提灯の製造が困難である大手町の高張提灯産業の製造場を置屋1階部に挿入する。その際、空間の大きさを決定するにあたり、提灯の以下の4段階の工程よりボリュームを検討した。



＜1階計画＞



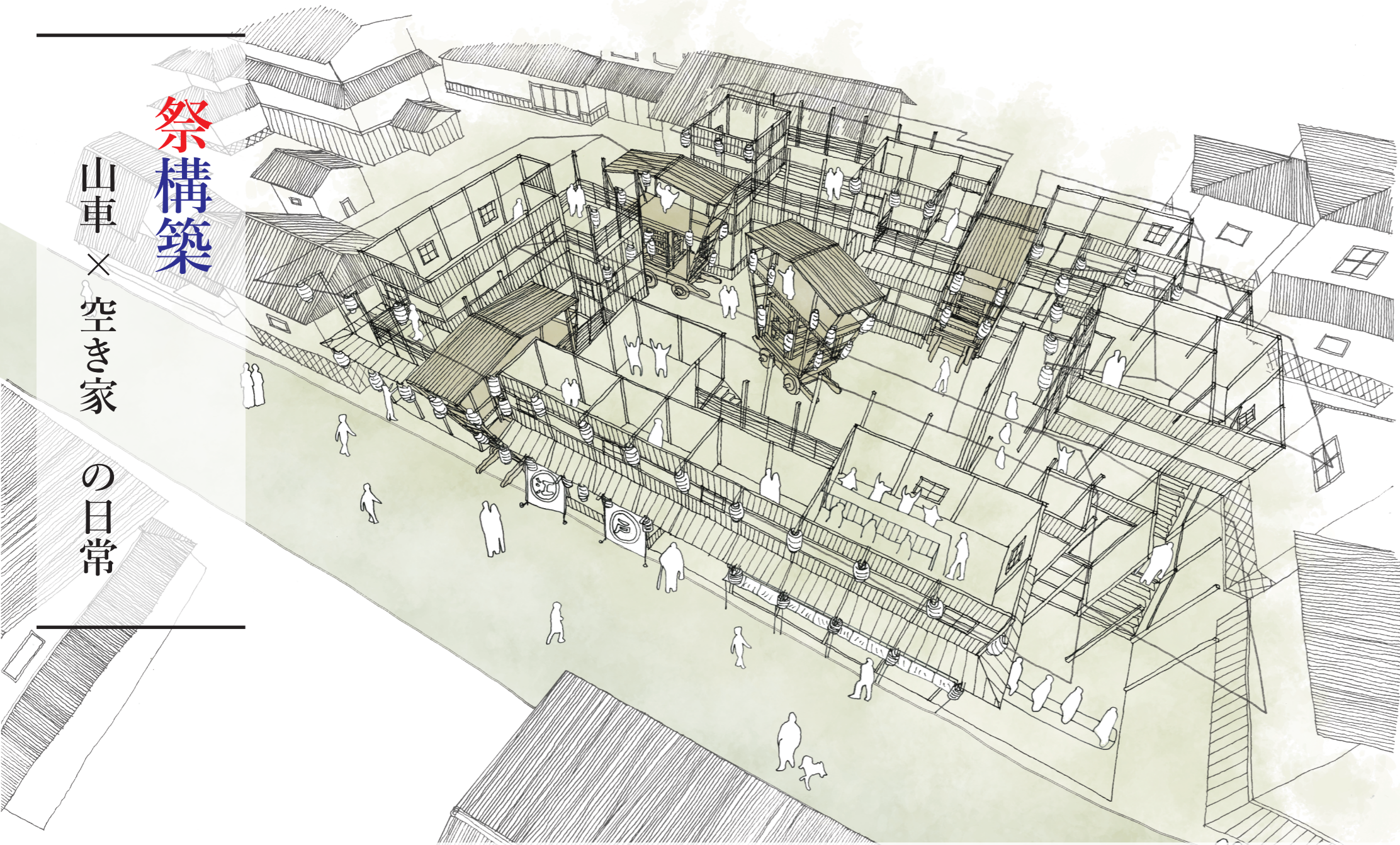
＜2階計画＞



祭構築

山車×空き家の

日常



山、鉦、笠、屋台、だんじりなど、日本各地で様々な名称で呼ばれている祭りの山車。絢爛豪華な装飾が施された車付きの大きな台が、祭礼の囃子のなかを人々に曳き回され練り行く様は、日本の祭りのひとつの風景とも言える。そんな山車の巡行が見られる祭礼行事が日本には数多く存在しそれらは地域ごとの風情や特色に合わせ、独特なものへと形態を変えてきた。また、これらの山車は古くから各地域の自治会により地域に保管され、管理されてきた。しかし近年、一部地域において、高齢化や世帯の共働きが進み、後継者不足による自治会の衰退が問題としてあげられる。さらに、それに伴い、山車の維持・管理が行き届かない問題が発生している。そこで、本計画では、上記のような問題を抱える埼玉県川越市を例として取り上げ、自治会の衰退に伴い維持・管理が厳しくなった祭りの山車に焦点を当て、新たな利用法とそれに伴う地域の活性化を提案する。

山車が力強く曳行され、提灯が横丁に活気を与える

大手町の提灯職人たちが山車に資材を運搬させる

